



大分合同新聞
2023年
9月19日(火)
朝刊 4面

「共生への第一歩は同じ職場から」。由布市挾間町古野の藤井望美さん(43)が夫と営むカフェでは、ハンディがある人も自分らしく働く。特別支援学校で教員をしていた頃から、どんな職場だろうと誰しも障害にかかわらず能力を發揮できると感じていた。「まずは健常者が障害者を知る機会が必要」。店内では、客も店員も障害を気にしない。

住宅街にある自家焙煎コーヒー



できることを探し共生

1が人気の店。一角では、大分市内の作業所から派遣された利用者や、販売用のドリップバッグを作っている。客の中にも障害者の姿があり、何の隔たりもない。

奥には服やバッグ、アクセサリなどの工房や展示棚があり、自身を含め、県内の作家らの作品も販売している。ハンディのある作家の物もあるが、「障害者が作った、という売り方は決してしない」。

10年ほど、県内の特別支援学校で教員をしていたことがある。職場体験で中学部や高等部の生徒を引率する中で、障害者の働き方に疑問を抱くようになった。菓子製造や箱折り、清掃など、卒業後の仕事の種類があまりにも少なく、賃金の低い現実がくせんとした。重度であれば、就労は無理だと決めつけられたまま、卒業の日を迎えるしかない。

障害者が障害者施設で働くのは、働きやすい仕組みではあるが、健常者との溝が生まれてしまう。「これではいつまでも差別の意識はなくなるらない」。少しでも現状を変えようと、4年前に店を始めた。

豆の焙煎の香りが漂う。重度の障害者も受け入れられるよう、焙煎機はタッチパネルで操作でき、視線入力も可能だ。働けないと諦めるのは簡単。できることを探す気持ちだが、生きるための選択肢を増やしていく。「今はまだ啓発が必要だけど、いずれは障害なんて言葉はなくなるよ」。そう話すと急ぎ足で厨房に戻り、温かいコーヒーを入れた。

さまざまなき方がある中で「私が今、進むべき道はこれだ」と目を輝かせる女性たちがいる。胸を張って歩む姿を描く。 ー 随時掲載 ー

藤井望美さん(43) =由布市=



夫婦でカフェを営む藤井望美さん。「障害の有無に関係なく、いろいろな人が顔を合わせる空間にしたい」 =由布市挾間町古野

〔問①〕 印象に残ったところに波線、主題（筆者が一番伝えたい箇所）に線を引こう

〔問②〕 感想や意見などを書いてみよう

※問①・問②自由記述

〔問③〕 漢字の読みを書こう

- ①支援 (しえん)
- ②派遣 (はけん)
- ③展示棚 (てんじだな)
- ④漂う (ただよう)
- ⑤選択肢 (せんたくし)

〔問④〕 次の意味を持つ言葉を記事の中から探してみよう

- ①間に距離があって離れること。 (隔たり)
- ②非常に驚くさま。 (がくぜん)
- ③人間関係などに不具合が生じること。 (溝が生まれる)